
まえがき ～斑鳩茂市作品集（まえがき部分のみ収録）～

undervermillion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まえがき 〈斑鳩茂市作品集（まえがき部分のみ収録）〉

【Nコード】

N7572Q

【作者名】

undervermillion

【あらすじ】

斑鳩茂市先生の作品のうち、まえがき部分のみ入手できました。作者の了解の上で、ここに公開します。

基本的に1話完結です。

気になるタイトルから読み始めてもかまいません。

どうでもいいですが、斑鳩茂市先生の^{いかるがもち}まえがき部分が読めるのはここだけです！

まえがき不要論（前書き）

ようやく冒頭部分が出来ました

まえがき不要論

まえがき不要論に、なぜ、まえがきがあるのか。
簡単に説明する。

本書は、西暦170年頃ローマの法学者テオニウス（注1）が書き残した書簡を元に、245年頃歴史家のテシスス（注2）が編集したものである。

西ローマ帝国崩壊後、逸失したものと考えられていたが、1320年頃北イタリアの修道院（注3）に遺されていた一冊（この修道院は後に火災による焼失を受ける）を神聖ローマ帝国出身の修道士（注4）が複写し持ち帰った。

その後、1560年代にフランクフルトの印刷所（注5）によりドイツ語で出版されたものが、1944年のノルマンディ上陸作戦時に連合軍の下士官（注6）が入手し、戦後パリの古美術商に売られたものをイタリア人の翻訳家（注7）が購入しイタリア語で出版された。

このような設定で、私（注8）が翻訳したことにすれば、無名の新人作家（注9）の評論よりは売れるだろうという編集部（注10）の方針に従った結果がこれです。

たしかに、新書版はそれなりに売れましたが、文庫版の出版にあたり、作成にいたる経過ぐらいはきちんと説明しないとさすがにまずいと思いました。

このような経過で作成されたことから、文庫版については、注釈を

本文に含めることで、いちいちページの行き来をしないようにすることに努めました。

(注1～10) 架空の人物・組織です。

～「まえがき不要論」(斑鳩茂市1998年)～

世界名作まえがき全集（前書き）

思いつきだけでやった。
今は公開している。

世界名作まえがき全集

名作には、前書きなど不要だ。

もし、あなたがそう考えているのであれば、この前書きを読み飛ばして、それぞれの前書きを読んでみてほしい。

前書きがいかに重要であるか明らかになるだろう。

名作といえども、それがいかなる意図によって書かれたのかわからなければ、作者の意図が読者には伝わらない。

読者の中には、「ガリア戦記」のように前書きがない名作があると、反論するかもしれない。

しかしながら、「ガリア戦記」の作成当時の読者にとって、この書名と作者名からいかなる内容が記載されているかは明らかでないことであり、前書きなど不要だったことを忘れてはならない。

作品がいったん、書き手から読み手へ離れば、作者の意図から離れてしまうのは仕方がないといえる。

それでも、何らかの意図を残すため、前書きがある。

そう思えば、前書きからいろいろな思いが読み取れるだろう。

〔「世界名作まえがき全集」(1996年 斑鳩茂市)〕

世界名作まえがき全集（後書き）

不定期掲載です。

ちなみに、次回以降のまえがきは「世界名作まえがき全集」の本編ではありません。

あしからずご了承ください。

カオスワールド 公式ガイドブック（完全版）

本書は、2021年6月に発売されたシミュレーションゲーム「カオスワールド」の公式ガイドブックの改訂版である。

本来であれば、この改訂版は発売される予定がなかったが、ふたつの理由により「完全版」として発売されることになった。

ひとつめの理由は、2021年クソゲー・オブ・ザ・イヤー大賞作品として最大限の評価を得られたことである。

受賞理由については、本書を購入した読者にとっては、説明不要だろう。

もう一つの理由は、2021年12月に発売された、「カオスワールド 公式ガイドブック」の内容についてである。

大賞受賞後、多くのプレイヤーがこの作品の恐ろしさを確認するために、このゲームを購入した。

しかしながら、あまりの難易度の高さに、ネットによる攻略情報ですら役に立たなかった。

「カオスワールド公式ガイドブック」は、この厳しい現実に対応するかのように発売されたのだ。

多くのプレイヤーがこの本により、クリアすることが出来た。しかしながら、このことが本当の悲劇の始まりとなった。

第2章の存在である。

特定の条件でクリアした者だけが進むことの出来る第2章。

苦難の末攻略したあとに続く道は、第1章の難易度と展開に反比例

する形で、甘美な世界であった。

また、第1章が何故あれほどまでにクソゲーだったのかが、納得できるだけの理由も示されていた。

あまりの理不尽さに挫折したプレイヤーにとって、「なぜこれが第1章ではないのか」と悔しむ内容は、第2章だけで、「普通に売れた」と評価される一方で、「第1章があったからこそ、第2章が神ゲーとなった」と評価するプレイヤーも大量に出現した。

しかしながら、第2章部分については、公式ガイドブックの攻略範囲外であり、第2章部分の攻略情報を望むプレイヤーの要望が完全版という形として出版されることとなった。

このような経過で作成された本書は第1章の攻略情報の再掲と、第2章部分の新規情報で構成されている。

当初は第2章部分のみの発売を考慮したが、第1章の攻略情報と重複する部分があったことから、まとめて3分冊として作成した。

「カオスワールド公式ガイドブック（完全版）」（2022年
斑鳩茂市）

感謝のことば

本書には、発表当時に世界最短の推理小説と評価された表題作を含め、12本の作品を掲載した。

本来前書きにおいて、推理小説のまえがきを行うのはどうかと考えるが、多くの読者は内容を承知しているので、表題作の作成経過のみにふれることにする。

この作品の発表前は、どこまでがミステリとして成立するのかという、いわゆる「ミステリ領域論」が盛んに展開されていた。

私自身は、ミステリ小説を執筆していなかったので、議論を遠くから眺めていた。

しかしながら、1996年に赤柳編集長から、簡単なミステリを書いてくれと意味不明な要請があった。

赤貧状態だった私は断ることができず、表題作を発表したのだが、まさか「ミステリ領域論」の議題の一つとして取り上げられるとは夢にも思わなかった。

とはいえ、「ミステリ領域論」がこの作品によって方向性の一つが決まった事は紛れもない事実である。

しかしながら、私の本職はミステリではないため、この作品以降、ミステリを書くことはなかった。

）「感謝のことば」（2001年 斑鳩茂市）

感謝のことば（後書き）

ご愛読いただきましてありがとうございます。

ネッシー白書（2007年版）

本書は、2007年度における、日本国内でのネッシーの生息及び分布状況等、国内におけるネッシー情報を網羅した内容となっている。

今年度の新たな試みとして、分布図を都道府県別に加えて、市町村別でも表記し、生息状況が詳細になるように配慮した。

これらの取り組みは、該当する市町村の協力が不可欠であったが、平成の大合併による業務の集中化や定数削減による正規職員の減少等にもかかわらず、調査に協力的であったことは、この場を借りて感謝の意を示したい。

最後に、2008年度に向けての取り組みであるが、白書の作成業務が独立行政法人に移行されることに伴い、全面改定を行うことになっている。

全面改定にあたっては、国民の視点に立って、より使いやすい白書作りを念頭におくことを誓って、冒頭の言葉としたい。

「『ネッシー白書（2007年度版）』（2008年 斑鳩茂市）」

言い訳をしない生き方（前書き）

最近、どうも体調が悪いようで、なかなかいい文章が書けない気がします。

言い訳をしない生き方

今回の文庫版の刊行にともない、読者の皆さんにお断りをする必要がある。

それは、刊行時期の遅れである。

本来であれば、2年前に刊行される予定ではあったが、編集部との意見の食い違いや、文庫版に当たったの修正作業、そして、4年前に死亡した父親の遺産相続の手続きの関係で遅くなってしまった。

編集部との意見の食い違いについては、1年間に渡る協議の結果、印税の上積みで了解が得られた。

また、修正作業については、刊行時の誤字脱字の修正作業を最小限省いたことで、当初2年かかる予定を半年まで切りつめた。

最後の父親の遺産相続の手続きについては、税務署からの指摘に従わなかったという言いがかりに、全面的に争うことになったことによる。

裁判所で争った結果、敗訴を受け入れるという精神的苦痛から立ち直るため、半年間の傷心旅行が必要となった。

いずれも、不可抗力としか表現できないが、私は生まれたときから言い訳をしない生き方を誓っているため、言い訳をすることは一切ない。

このことは、本書をごらんいただければ理解してもらえと思う。

2001年11月 熱海の旅館にて

「言い訳をしない生き方」(2001年 斑鳩茂市)

言い訳をしない生き方（後書き）

べつに、今日が暇だから、2話掲載したわけではありません。

週刊 マイホームをつくろう（創刊号）

このたびは弊社の「週刊マイホームをつくろう」をご購入いただきました。まして、まことにありがとうございます。

マイホームの夢を実現することを目的に、2,000週間（約40年）にわたり資材をおつけすることで、純日本風の戸建てを完成することが出来ます。

本誌において、「家の作り方」を解説しますので、1級建築士の免許をお持ちの皆さんであれば、誰でも簡単にマイホームを手にすることが出来ます。

また本誌連載において、「建築確認申請の仕方」、「農地転用の申請方法」、「竪穴式住居の作成法」など日常生活に役立つ情報が満載となっております。

なお、各号1万円ですが、一括事前支払いをすることで総額1,980万円と大変お買い求めしやすい価格となっております。別添の予約申込書をご利用下さい。

※ 購読にあたってのご注意

完成予定のマイホームについては、西暦2005年時点での建築基準法をもとに設計されています。

法律改正にともなう、耐震補強等は各自で対応いただきますよう、よろしく願います。

（「週刊マイホームをつくろう（創刊号）」（2005年 斑鳩茂市））

この言い訳がすごい！（2008年度）

「この言い訳がすごい！」 2008年度の審査委員長を務めることになった斑鳩茂市です。

「言い訳をしない生き方」の著者である私が、なぜ審査委員長という役割を受けたのかという経過を説明することで、本書の内容が理解できることを確信している。

審査委員長を受けるにあたって、私は「言い訳をしたことがない自分が審査委員長を受けるのはおかしい」と拒絶したのであるが、編集部から「言い訳をしたことがないのであれば、なおさら言い訳することのおかしさを指摘する資格がある」と説得され、嫌々ではあるが了解した。

決して、審査委員長の報酬につられた訳ではないことを明言しておく。

それにしても、編集部から審査委員長就任祝いとして接待された料亭での食事は、じつに旨かった。

こんな食事が食べれるのであれば、いつでも引き受けると冗談を言ったのだが、「今回だけです」と編集長から何度も念を押されたのは、本当に残念である。

「この言い訳がすごい！」（2008年版）（2009年 斑鳩茂市）

この言い訳がすごい！（2008年度）（後書き）

だんだんと斑鳩茂市先生の実像が明らかになるかどうかは、定かではありません。

不定期連載ですから。

2100年 日めくりカレンダー

21世紀最後の年の日めくりカレンダーである。

ちなみに、2100年は100年に一度の閏年ではない年でもある。

このような年のカレンダーの作成企画に携わることが出来たことに非常に感謝している。

これで、来年の大学受験を控えた娘の学費の目処がついた。
すこしは、父親の威厳が取り戻せる。

先日のように、「一緒に風呂にはいるのか」と言っても、娘から変態を見るような目つきで睨まれるということも無くなるだろう。

感謝といえば、日めくりカレンダー作成にあたって、協力者への感謝を表明したい。

「すぐに使える金言集365」の著者である、法道啓子氏には的確な指導をいただいた。

これで、夕食に付き合っていただけのなら、完璧であるのだが、世の中上手くいかないものである。

「2100年日めくりカレンダー」（2099年 斑鳩茂市）

人をアテにするな！　　〈自己責任の世界で生き抜くために必要な66の方法〉

執筆にいたる経緯については、謝辞によりかえさせていただく。

まずはじめに、本書の執筆を提案してくれた、人材派遣会社大手の恵我利社長である。

私を含めた多くの国民が、格差社会の問題点を、一部の巨大企業や才能を持つものだけが、多くの利益を得ることができるという社会構造が問題であると考えていた。

にもかかわらず、恵我利社長は「すべては自己責任だ」という一言で切り捨てた。

恵我利氏は両親から相続した恵我利財閥という、潤沢な資金を元手に「自己責任で」開業し、以来わずか3年で業界第2位にまで成長していた（前年に業界第3位と第6位を相次いで買収した手腕には、特に目を見張るものがあった）。

恵我利氏は、拙書「言い訳をしない生き方」に深く感動し、「ぜひとも、自分の理念を本という形にしてくれ」と懇願してきた。

彼の情熱的な懇願と、経済的支援が無ければ、本書が日の目を見ることはなかったであろう。

続いては、編集作業に携わってくれた、赤柳編集長を始めとする編集部の方々である。

本書の執筆にあたり、都合のいい理論構築、データの改ざん作業をはじめ、数多くの業務に根気よく協力してくれた。

彼ら、彼女ら（特に神楽宮氏は、私の目の保養になってくれた）の活躍がなければ、ただのトンデモ本扱いされたことだろう。

最後に家族のことについて、触れさせてもらおう。

「言い訳をしない生き方」の印税が減少してから、娘の学費問題で相当苦勞していた私に、「自己責任だから」といって、修学資金を稼ぐため、日夜アルバイトに精を出す娘の絵里菜と、「あなたのようない作家に嫁いだのは自己責任よ」といって、パートで生活費を捻出してくれる妻の真名美には、作家生活を続けていくことが出来たことに対して本当に感謝している。

「人をアテにするな」自己責任の世界で生き抜くために必要な66の方法」(2007年斑鳩茂市)

人をアテにするな！　　↓自己責任の世界で生き抜くために必要な66の方法↓

この作品はフィクションです。
念のために書いておきます。

中学生にも解ける！ ポアンカレ予想

ポアンカレ予想とは、クレイ数学研究所が2000年に発表した、ミレニアム懸賞問題のうち最初に解決された問題のことである。

本書はポアンカレ予想を中学生でも解けるように企画した。

企画を知った当初、正直無理だろうと思った。

しかし、編集長から、すべての中学生がポアンカレ予想の問題解決が出来るだけの理解力を持つことが出来れば、この国の将来は安心だという言葉にほだされた。

とはいえ、これだけで、ポアンカレ予想を解けるようにするという、難問が解決できるわけでもなく、分冊化による方法で問題解決を図ることにした。

ポアンカレ予想を解くために必要な知識を身につけるため、1つのテーマごとに分冊化することで少しずつ中学生の理解力を向上させるのだ。

しかしながら、分冊化作業にも難航した。

最終的に分冊数が千冊前後となることが判明した段階で、毎日1冊読まなければ中学生を卒業してしまうことになり、本書の目的が達成できないことになるからだ。

そのため、この第1分冊を速読術にあてることにした。

最初に速読術を身につけることで、他の学業に専念しながら、ポアンカレ予想を解くことに費やすことができるからだ。

最後に、今後の刊行ペースについて記載しておこう。

現在の計画では、月2冊の刊行ペースを計画しており、最終分冊1

008冊目の刊行が2058年の予定である。

これにより、2046年生まれ以降の中学生は、卒業までに確実にポアンカレ予想を習得できるだろう。

ちなみに、この計画が好評だった場合、2020年前後にシリーズ第2弾として「中学生でも解ける！ リーマン予想」が刊行される予定になっている。

）「中学生でも解ける！ ポアンカレ予想」（2016年 斑鳩茂市）

中学生にも解ける！ ポアンカレ予想（後書き）

この本が刊行されたら、私も読みたいです。

混浴露天風呂連続殺人事件 女子大生との優雅なひととき編

本書は昨年末に騒がれた、混浴露天風呂連続殺人事件に巻き込まれた私の視点からの物語ではあるが、決して推理小説などでは無い。事件の内容自体は、新聞や週刊誌等で騒がれており、私が事件を解決したことも既に読者のみなさんにご承知のことだろう。

では、私が本書を出版した理由は何故かということになるのだが、私の身の潔白を証明するためのものである。

私が犯人ではないことは、ご承知であることから、何故身の潔白を証明する必要があるのか訝しむ読者も多いことだろう。

私が証明したい事はただひとつ、自分がやましい気持ちで混浴露天風呂に入らなかったことである。

一読して頂ければ、いかに私がやむを得ない事情で全国各地の混浴露天風呂に入る必要があったのかご理解いただけると信じている。

特に、離婚調停中の妻にはぜひ読んでいただきたいものである。

2002年6月某日 岡山県湯原温泉にて

「混浴露天風呂連続殺人事件 女子大生との優雅なひととき編」
(2002年斑鳩茂市)

混浴露天風呂連続殺人事件 女子大生との優雅なひととき編（後書き）

この「まえがき」の後に続く内容はR－18に相当する内容になりますが、掲載している「まえがき」部分だけなら、PG－12にも該当しませんので、安心してお読み頂けます。

当然この作品はフィクションです。

現実の事件や地名等は一切関係ありません。

さくせん「あとを たのむぞ」

本書はMMORPG「カオスワールドオンライン」内で執筆された、表題作「さくせん「あとを たのむぞ」」を含む作品集である。

多くの読者が、斑鳩茂市の執筆した小説をカオスワールドオンラインで発表されたと思われるようだが、実際には異なる。

斑鳩茂市の死期が近いことを知った、カオスワールドオンラインの運営スタッフの1人が、斑鳩茂市に対して「自動執筆ジェネレーター」の監修を依頼したのだ。

斑鳩茂市は、自分の死後に必要とされる娘達の養育費の事を考え、快諾した。

斑鳩茂市のこれまでの全作品を基にして作られた、自動執筆ジェネレーター、通称「斑鳩ジェネレーター」は、斑鳩茂市が死ぬ5日前に完成した。

斑鳩茂市は、第1作目「10年後を生き抜くための投資理論」を読んで、内容に満足して亡くなった。

「さくせん「あとを たのむぞ」」（クレルダン王国歴495年 斑鳩茂市）

さくせん「あとを たのむぞ」(後書き)

最近調子が悪いようで、掲載が今頃になりました。
ジェネレータージェネレーターの調子ではないですよ。

心が動く結婚スピーチ15例

皆さんは、結婚式の時嫌な事を言われたことはないだろうか。

私の場合は、さんざんひどいことを言われてきた。

最初の結婚式の時、

「斑鳩先生は、けちで有名で、一度もおごってもらったことがありません」

「茂市君は、もてたことがなく、結婚したことは世界七不思議の一つとして認定されるでしょう」

「急にスピーチを頼まれたので、今回はあまり話すことはありません。次回までにはしっかり話す内容を考えておきます」

「「だれも、茂市君と結婚するわけじゃない。しょうがないわね。私が結婚してあげる」というプロポーズの言葉を聞いてがっかりしました。私も同じことを言うつもりだったのに」

次の結婚式の時、

「二度あることは三度あるといいまして」

「前の新婦さんのほうが美しかったですね」

「私がい物で留守をしている間にプロポーズするなんて、卑怯です」

3回目の結婚式は

「今回は何年持つか、仲間内で賭をしました。一番多かったのは3年でした」

「前回と同じ話をしますので、新婦さんとそのご親族とご友人だけ

は、よく聞いてください」

「今回も、ブーケを受け取った人が、斑鳩先生の次の結婚相手になるのでしょうか」

4回目の時は、

「もう話すネタがありませんので、三つの袋の話をお願いします」

「次こそは、私が茂市君の結婚相手になります」

「私のほうが可愛いのに、今回も結婚相手に選んでくれないなんておかしいです!」

「斑鳩先生の事を愛している人が、私以外に4人もいたなんて、今でも信じられません」

「皆勤賞は、私と茂市君だけです。次こそは花嫁で参加したいです」

私は、こんな失礼な彼女たちを教育するために、本書を執筆した。みんなには、来月開催する私の5回目の結婚式までにはしっかり読んで欲しいものだ。

「心が動く結婚スピーチ15例」 (2014年斑鳩茂市)

心が動く結婚スピーチ15例（後書き）

ドラゴンクエスト？ 勇者ではないアーベルの冒険と同時に更新しました。

ネタがかぶっているような気がしますが、たぶん気のせいでしょう。あと6月だからという理由でもありません。

なぜか、書けば書くほど斑鳩先生がひどくなります。来週掲載分は大丈夫だとは思いますが。

ちなみに来週のタイトルは

「非現実の艦隊物語（12） 決戦！洗足池海戦」
です。

本編では「選択機^{リセットボタン}」や「土星破壊銃^{みずてつぽう}」などの厨二兵器が満載ですが、掲載されるのはまえがき部分なので安心して読みいただけます。

非現実の艦隊物語（12）

決戦！洗足池海戦

本来であれば、斑鳩先生が前書きを書かれるところでしたが、この作品の完成直後に亡くなられたことから、お悔やみを述べるとともに、生前の先生についていくつか述べさせていただきます。

私が斑鳩先生に師事するきっかけになったのは、「青バラ園」での出会いでした。

青バラ園とは、戦後すぐに身よりのない子ども達が生活するために作られた施設で、私はここで養ってもらっていました。

斑鳩先生も青バラ園のご出身で、作家として成功されるまで大いにお世話になったと話しておられ、お礼をするために、お忙しい中、ここによく立ち寄られました。

斑鳩先生は、青バラ園で生活する子ども達に慕われ、編集部連れ去られるまで、毎日楽しそうに話をされていました。

ある年のことでした。

「今年は厳しくなるかもしれないね」

「そうですね」

全国的な台風の被害のニュースを眺めながら、斑鳩先生と園長先生が話しておられるのを耳にしたことがありました。

当時の私は何のことかわかりませんでした。今では年末にこの施設に寄付される義援金の額が減ることを心配されたのだと、園長先生から教えて頂きました。

施設の経営はあまりよくありませんでしたが、斑鳩先生が多めに寄

付されたので問題なかったそうです。

青バラ園には、斑鳩先生の著作が寄贈されていましたが、一冊だけ置いていない本があります。

最初に指摘した人は、当時最大のスポンサーである恵我利氏でした。

「斑鳩先生、何故わしの本がないのだ」

恵我利氏は、斑鳩先生の著作「人をアテにするな！」が無いことを指摘しました。

私も、そのときになって、初めて知ったのです。

私が斑鳩先生の立場でしたら、

「その本は、いま子どもが借りて読んでいます」
とか、適当にごまかしていたと思います。

しかし、先生は自分の考えをしっかりと言いました。

「あの本は、ここには置けません」

「なんだと！」

「子ども達に、あの本は読ませられません」

「先生」

園長先生は、お二人を仲裁しようとしてましたが、斑鳩先生は臆することなく話を続けました。

「わからないのですか？まあ、わからないでしょうね。あなたには」
「なにを」

恵我利氏は今にも斑鳩先生に襲いかかろうとしていた。

「ここにいる子ども達は、あなたのように親の支援を受けることができます」

「それがどうした」

「子どもは親を選ぶことができません。それでも自己責任と言い張ることができるか」

「ふん！覚えていろ。こんな施設くらいどうにでもしてやる！」
恵我利氏は吐き捨てるかのように帰っていききました。

「斑鳩さん」

「大丈夫ですよ、園長先生。それに、あの人からの支援はどのみち受けることは出来ませんから」

心配そうに見つめる園長先生を斑鳩先生は優しく慰めていました。
いつもの穏やかな斑鳩先生に戻っていました。

結局、斑鳩先生のおっしゃるとおりになりました。

皆さんもご存じのとおり、恵我利氏は脱税と独占禁止法及び派遣労働法違反で実刑判決を受けました。

おそらく、斑鳩先生は原稿を作成されるときにこの日が来ることを確信されていたと思っています。

恵我利氏は、斑鳩先生が情報を流したと訴えたようですが、結局そのような事実はありませんでした。

ちなみに斑鳩先生は、「人をアテにするな！」で得られた印税を、全て青バラ園に寄付していました。

後日、私は斑鳩先生に

「どうして、そのことをマスコミに公表されなかったのですかと質問しました。」

当時の斑鳩先生は、恵我利氏のプロバガンダをしたと周囲から批判されたからです。

斑鳩先生は、ひとこと

「私の印税をどのように使うか、人に教える義務はない」とおっしゃいました。

後で、ご遺族から伺いましたが、あの本が売れたと聞くたびに、斑鳩先生は悲しい顔をされたそうです。

よほど、あの本を読まれたくなかったのでしょうか。

ただし、現実には厳しく、恵我利氏の思いを伝える唯一の本として、当時はかなり売れていました。

斑鳩先生は、あの本の前書きで皮肉を書かれましたが、小さな抵抗はほとんど理解されませんでした。

私は、斑鳩先生の病床で、次代の斑鳩茂市を継ぐことをお伝えしました。

斑鳩先生は、

「私の名前を継ぐなんて、馬鹿なことは止めなさい。私よりもあなたの方が人気作家なのですから」と謙遜して言われました。

斑鳩先生の生前中、結局お許しをいただけませんでした。先生の死後、ご遺族から遺書を見せていただきました。

「作家名、斑鳩茂市については、好きに使うがいい」とお許しをいただきました。

今から思えば、斑鳩先生が恥ずかしがられたのかもしれませんが。

話が長くなりました。

斑鳩先生の最高傑作「非現実の艦隊物語」最終巻です。ぜひお楽しみください。

「非現実の艦隊物語（12） 決戦！洗足池海戦」（2026年 斑鳩茂市）

非現実の艦隊物語（12）

決戦！洗足池海戦（後書き）

この話はフィクションです。

申し訳ありませんが、「青バラ園に寄付したい」と言われても、対応することはできません。

新しい電子申請のあり方について

予習　ざるそば学園の起源について

これから起こりうることを、知ることが出来るのなら、その後の人生にとって有意義な事になるかもしれないが、起こりうることに備えてあらかじめ学ぶことが苦痛である限り、あらかじめ知り得た事実を生かすことが難しくなる。

だから私は、簡潔に述べることにする。

ざるそば学園の起源については、創設者が通っていた中学校の卒業文集にまで遡ることができよう。

私の将来

3年1組　長谷橋

真奈衣

いずれ明らかになる世界を、言葉によって説明することの意味について、いろいろと解説することは、水曜日の次の日が木曜日で、その次が金曜日であることを納得できない人間にくどくどと説明することのように、意味のないことですが、それらの法則を理解できない人々にある程度の解説を行うことによって得られる利益を考えれば、完全には無駄なことではないと思います。

我々の全てが幸せになれるという幻想が、物理的な面から保証できない理由により、破られて以降、人類は常に二つの選択肢を突きつけられてきました。ごく一部の人間だけが生存可能な社会にすることで、適正規模の生活環境を手に入れる選択肢か、あらかじめ生存可能な水準を引き下げることにより人口水準を維持する選択肢です。

いずれにしても、現状を甘んじて受け入れるのでしたら、やがて資源は底をつき、破壊的行動の果てに、いずれかの方法が選択されるでしょう。

それでもなお、新しい可能性を模索する事を否定するつもりはありません。私自身、わずかに新しい道を探し求めるため、様々な方法論の実践をおこなっていました。残念ながら、それらのいずれも私の存命中に成果を得ることはできないけれども。

しかしながら、本当に新たな道へと進む方法論が存在するのであれば、未だに未熟な私にはその方法を入手するための研究機関が必要になります。ただし、中学卒業後に入学する既存の教育機関からそれを求めることは不可能です。なぜなら、前者は必要な方法論の確立が目的であるのに対して、後者は一定水準の学力を持った生徒を継続的に生産するのが目的であるからです。言うまでもありませんが、これらに優劣をつけることに意味はありません。

さて、現在存在しない研究機関を作るのに必要なものは、何でしょう。残念なことに与えられた文面では続きを書くことを許してはくれないようです。

よくもまあ、こんな内容で載せる事を学校が許したものだとは私などは感心するが、とりあえず、かみ砕いて言えば、人類を何とかするために、新しい研究機関をつくるのが将来の目的らしい。現に長谷橋は学校を卒業後、私立ざるそば学園を設立し、第1期生として法条和良が入学することになる。

物語の始まりをどの時点にするかということは、人それぞれだが、はせはしまなえ長谷橋真奈衣とほうじょう かずよし法条和良についての物語であれば、放課後の教室から始めるしかないのだろう。

自分がしでかした失敗を他人に伝える理由は、いろいろと考えることができるが、法条和良の場合、そのほとんどが失敗した損失分を他人に話すことで埋め合わせようとする代償行為であった。

法条が私立ざるそば学園に関わるきっかけについて話をする理由は、このような代償行為に他ならないと法条自身は確信しているようだった。

法条は誰もいない教室で本を読んでいた。中学生の時は図書室で本を読む習慣があったのだが、高校へ進学してからというもの、半ば大学受験生の自習室と化した図書室は、法条にとって敬遠するようになっていた。

入学して間もないころは、学校の授業内容についてゆくことを目的に図書室で自習をしていた。しかし、同様の考えを持つ生徒があまりにも多いため、勉強に集中することができず、結局教室で勉強する事になった。

しばらくすると、法条は自習することはやめたのだが、図書室にある本を読むときも教室で読むという習慣が始まり、現在へと至る。そんなある日のこと。

「ねえ。何の本を読んでいるの」

法条は白衣を着た女性が目の前に現れたことに驚いた。

登場した女性は知っている。確か長谷橋真奈衣だ。眼鏡をかけなくともはつきりとわかる。

だから、法条が驚いた内容は、彼女が白衣を身につけていること

だった。

普段、長谷橋真奈衣は授業中のどのような場面においても、白衣を着たところを見たことがないからだ。何のためにわざわざ着替えているのだろうか。そのような法条の考えを無視して、長谷橋は同じ質問を繰り返す。

「ねえ。何の本を読んでいるの」

仕方がない。法条はそんな様子をしながら、本を長谷橋に見せつける。

魔法関係の本だ。たぶん。

たぶんと言ったのは、法条には理解できない理屈やら理論が列記されており、しかもそれらに対しての注釈の量も尋常ではないため、法条にとってこれが魔法を使用するための実用書になるかどうか判断できないからである。

「そう。あなた魔法が使いたいよね」

長谷橋は何故かいたずらっぽい目で質問する。

「使えるのなら」

法条は気楽に答えた。

「こんな本なんか読んでも、使用方法なんか書いてあるわけがないわ」

長谷橋は断言する。

法条は思わずムキになって問いたです。

ではどうやって使用するのか、長谷橋は知っているのか。

「魔法が使いたいのなら、この魔法解析学講師の長谷橋に任せなさい」

魔法解析学の講師。長谷橋がそんな講師だとは初耳である。

「それはあなたに話したのは初めてだから」

長谷橋は当然の感じで答える。

「・・・たしかに」

法条は念を押す。

「とにかく、本当に魔法が使えるのだな」

「しつこいわね。この方法なら確実よ」

長谷橋は、白衣のポケットから、折り畳まれた紙を法条に手渡す。
「そんなの簡単よ。この書類に必要な事項を記入すればいいの」

法条は丁寧に折り畳まれていた紙を開くと、上に書かれた文字を口にした。

「魔法使用許可願」

法条は首をひねる。まさか、悪魔との契約書なのか。魂を引き替えに魔法が使えるとか。

「そんな、たいした内容じゃないわよ。ただの魔法使用許可願よ」
用紙には、使用目的、使用場所、使用期間などの項目が用意されていた。

記入項目の多さは、レンタルビデオ店の会員証の申し込み書よりも豊富だが、婚姻届ほどは多くないようだ。

ただ、左上にカッコ書きで書かれている（様式第666号）には、少し苦笑した。

「許可がいるのか」

長谷橋は法条を馬鹿にしたように答える。

「当たり前じゃない。好き放題に魔法を使ったら、迷惑この上ないわ」

と言うことは、申請すれば魔法がつかえるのか。

「そうね。使用目的が校舎を破壊するとかでなければ、問題ないでしょう」

確かにそうだ。ガラスでも割ったりすれば賠償金も結構かかるだろうし。

「それに、事前の準備も必要だしね」

やっぱりいろいろ準備が必要なようだ。いろいろと質問したいこともあったがさすがに、これ以上馬鹿にはされたくないで法条は黙っていた。

「それに私は理事長でもあるのだし」
理事長？なじみのない言葉だな。

「あまりなじみがないかもしれないわね。公表したこともないし」
長谷橋は待ちわびたように話を切り出す。

「とにかく、申請するの？」

「ああ」

法条はそう話すと、机の中から筆記用具をとりだして、必要事項を記入する。

記入しているあいだ、教室は静かに時間が過ぎていった。

「出来たのね」

長谷橋はそう言うと、法条が書き終えたばかりの書類を強引に取り上げ、しげしげと眺めると、一言。

「使用開始は明日の夕方で構わないかしら」

法条はうなずく。

「とりあえず、理事長権限で決裁にしておくわ」

長谷橋は胸ポケットからボールペンを取り出すと、後ろの部分のキャップを取り外し、理事長欄にスタンプを押印した。押された後には、くっきりと「はせはし」と表示されている。たぶん後でにじむな、これは。

「では明日、夕方視聴覚教室で」

そういつて、長谷橋は去っていった。

法条はこの日の事を振り返るたびに、どうして長谷橋と関わってしまったのか後悔する。しかしこの日の法条は、魔法を使うことが出来る事への期待と不安で他の事を考える余裕など全くなかった。それに、法条が本当に後悔すべきなのは、この翌日の行動だったかもしれない。

そして、翌日の夕方。

法条と長谷橋は誰もいない視聴覚教室に集まっていた。

長谷橋は今日も白衣を身につけていた。ひょっとして白衣を身につけないと魔法は使えないのか。と法条は思ったが、古今東西、魔

術師と自称していたものたちは、特に白衣を身につけてはいなかった事を思い出す。ただ評価対象としての魔術師があくまで、自称であるために、結論は保留するしかない。

長谷橋は座っていた机の上から立ち上がると、前触れも無く話し始める。

「まずは、机と椅子を後ろに移動して」

「どうしてですか」

「邪魔だから」

「・・・僕一人で」

「あなた、魔法を使いたくないの」

法条は何も言わずに、一人で机と椅子を全て後ろに運んだ。

広くなった教室の中央で、長谷橋は法条に宣言する。

「さあ、準備が出来たようね。いつでもどうぞ」

しばしの沈黙。

「どうしたの。やる気が全然感じられないけど」

長谷橋は法条をにらみつける。

「いや、いつでもどうぞと言われても」

「別にわたしの前だからって、遠慮する事はないのよ。ちゃんと秘密は守るから」

長谷橋は明らかに不思議そうな様子で法条を見つめる。

「ああ、そうか。」

長谷橋は一人納得した顔つきをして、

「威力の大きい魔法を使うので、教室が壊れないかと心配なのね。」

大丈夫よ、ちゃんと結界も張っているから、多少強力な奴でも問題ないわ」

法条はどうやら長谷橋が勘違いしていることに気がついた。

長谷橋の勘違いをただそうと声をかけようとしたそのとき、扉の向こう側から高らかな声が聞こえた。

「その通り。おかげで、君の所在を確認することが出来たよ。長谷橋君」

黒衣のマントをなびかせた長身の男が入室してきた。

「・・・暑くないですか」

法条は長谷橋への質問は、ひとまずとっておくことにして、初対面の黒衣の男の服装について、心配そうに法条は質問する。

「私はいつだって冷静だ。そうだろう長谷橋君」

無視された格好になった法条は質問の意味を補足した。

「あの、服装について、質問したのですけど」

「やれやれ、この少年は最近の法衣の知識を知らないようだ。」

黒衣の男は説明を続ける。

「法衣の世界にも、技術革新が進んでね。割と通気性がいいのだよ。長谷橋君の白衣と一緒にね、君のようななどこの馬の骨ともわからない初心者水準の魔術なら、優しく包み込んでまもってくれるだろう」と、ようやく黒衣の男は視線を法条の方にむける。

「そうか、君が長谷橋君の新しい従僕か」

「違うわよ」

「そんなものになったつもりはない」

法条はもちろん長谷橋も、心外だという感じで答える。

「もう少し、見込みがあると思ったのだが、残念ながら一般人のようだな」

黒衣の男は、しばらく、法条を値踏みするようにながめたあとで、「そうか。しかしそちら側の人間なら容赦はしない」

黒衣の男はそう言い終わると同時に、何かを上に放り投げた。

放り投げた何かは、一瞬のうちに天井を突き刺し、すぐに、反射された感じで、強い光の束として周辺に降り注ぐ。

「ぐばな」

法条はたぶん、こんなかんじの擬音を発した。

無数の光の束が、法条の周りに突き刺さり、自分のお腹にも数本突き刺さっているのに気づく。しかし、それらは体内において異物感を持っているのにもかかわらず、痛みは存在しなかった。出血も見られない。

「長谷橋君。結界の腕を上げたようだね」

黒衣の男は賞賛の声をあげる。

長谷橋は澄ました顔でこたえる。

「一日かけて準備したからね。なにしろ、この人は自分の術式を教えてくれなかったし」

「なるほど、力場を凝縮した訳か。道理で、丁寧な力場の隠し方だと思ったよ。いずれにせよ長谷橋君。ここでは、君を殺せない。別の機会にするとしよう」

「賢明な判断ね。それから眠り姫によりしく伝えて」

「ああそうしよう、長谷橋君。だが、残念なことに姫は先日起きたばかりなので、しばらくは話は出来ないだろう」

「大丈夫なの？あなたは姫の護衛をせずにこんなところに遊びに来て」

「仕方がない。この仕事は、姫が命じた仕事なのだから」

「だったら、早く帰ったらどうなの」

「確かにそうだ。ここに長居をしても給料は増えないからね。ではさらば」

黒衣の男は去ろうとするとき、法条に向かって何かを投げつけた。

「おやおや。」

金属製の菜箸だった。それは法条の胸に直撃する直前で、床に転がった。

法条は唾然としたまま、なにかを口にしようとしていたが、無理だった。

法条を無視して、黒衣の男は会話を始める。

「N式術法はおろか、物理攻撃まで防ぐとは」

「長谷橋君もすみに、おけないね。この少年に対して、結界が及ぶと言うことは、契約を結んだのか」

長谷橋は、先ほどまでの余裕を失い、急にムキになって言い返す。
「どうでもいいでしょ、そんなこと」

黒衣の男はにやりとしながら切り返す。

「確かにどうでもいいことだ」

黒衣の男は、投げた菜箸を回収しないまま、教室を出ていった。

法条は黒衣の男を見送りながら、あの姿で歩き回ったら、警備員に不審者扱いされるだろう。などと考えていた。

「おい」

「なによ」

「あの不審者、ほつといていいのか」

「別にいいわよ」

「今の内に何とかしないと、月のない夜に不意打ちを食らうのではないか」

法条は命の危険を訴えた。

「何とかするって、何とか出来るの？」

法条は言葉に詰まる。

「それに、この私に人殺しになれと」

法条は黙って俯いた。

「さてと」

再び2人きりになった視聴覚教室で、長谷橋は法条に話しかける。

「邪魔者もいなくなった事だし、さっさと続きをしましょうよ」

「続きって」

「魔法を使いたいのでしょ。安心して、今の魔法も完全に無力化してきました。ああ、楽しみだわ、あなたがどのような術式を使うのか。法条姓なら法理七式かと思ったけど、さすがに当たり前すぎるわよね。だったら、川迫^{こうせ}改法なのかしら。あの術式は、詠唱法が非常に難しいって聞いたけど、やはり、まだ研究改善の余地が残されているということかしら。末恐ろしいわ。完成したら、世界の終焉が訪れてしまうかも。それとも意表について、海外で修行を積んだとか・・・」

延々と続く長谷橋の独り言を止めない限り、話が進まない感じを取った法条は溜息をついて話す。

「僕が知りたいのは、使用許可では無くても、使用方法です」

「・・・やっぱり使用方法は、って何のこと」

アフリカに伝わる古代呪術の解説を始めようとした、長谷橋は法条の言葉に疑問を呈した。

「だから、僕が知りたかったのは、魔法の使用許可を得るための方法ではなくて、魔法を実践使用するための方法論です」

「えっ、そうなの」

長谷橋は明らかに失望した表情を見せる。

「せっかく期待して結界もいろいろ張ったのに、無駄だったわね。これじゃあ、契約も無意味だわ」

法条は質問する。

「契約ってなんですか」

「あら、気づいていたの。それよりも、あなた。魔法を使用するなら、ものになるかどうか試してあげる」

そういつて、今度は白衣の胸ポケットから、手帳を取り出すと、しおりを挟んだページを開きつぶやいた。

「私の存在が消滅しても、記憶に残ることが出来るのならば」
法条は黙ったまま、長谷橋を見つめる。

「・・・残念だわ」

「まさか」

「あなたには、魔力がないわ」

結局、魔法は使用できなかったが、このあと先日提出した「魔法使用許可願」の件で法条と長谷橋はもめることになる。これが、法条の悩みの種である私立ざるそば学園の入学式だった。

補講 魔法使用許可願に記載されていた内容（抜粋）

申請者は当魔法使用許可願いの申請に当たって、次の事項を承認します。

- 1 申請者（以下「甲」とする）は、許可者私立ざるそば学園（以下「乙」とする）に対して、本書魔法使用許可願い（以下「申請書」とする）の許可をもって、魔法を使用することができる。
- 2 甲は申請書の許可を受けた時点から、乙に入学されたものとする。ただし、既に入學をしているものについては、この限りではない。
- 3 甲は第1項において、許可を受けた日から使用日もしくは1週間のいずれか早い時点までに、許可の申請取消願い（様式第667号）を提出する事により、許可の取消を行うことができる。ただし、この場合においても、甲は引き続き第1項を除く各項目を遵守しなければならない。
- 4 乙は本申請書に対する許可を与えたことによる、甲に対してのいかなる損害を支払う責任を一切持たない。
- 5 これらの項目以外の件について、甲は私立ざるそば学園の校則および理事長の命令に従わなければならない。

もしも、この作品世界が、電子申請が普遍化されていたら、あらかじめ申請者が誤解を受けることなく目的の申請を行うことができたであろう。本書では、現在政府が進めている電子申請システムの理念と仕組み、そして現状の課題について解説する。

「新しい電子申請のあり方について」（2033年斑鳩茂市）

新しい電子申請のあり方について（後書き）

この話だけで、これまでの掲載量の4割を占めたりします。

お前は俺の、はかいしん！（斑鳩茂市版）

私の友人作家と酒を飲んだときのことである。

新しく執筆する予定のライトノベルのネタについて、いろいろ話していた。

私が飲みながら話していたネタは、

主人公の家に突然、美しい女神が押しかける。

と思ったら、彼女は破壊神であり、破壊神とはいろいろな物（神によって分野が異なる）を破壊することで、成長していく神であった。彼女が主人公をねらったのは、彼女の破壊能力が「フラグを破壊する」ものであり、主人公がすぐにいろいろなフラグを立てるからだった。

さっそく、幼なじみや学級委員長、部活の先輩との恋愛フラグを次々とへし折られ、（他にも電車の空席に座れるとか、投げた空き缶が偶然ゴミ箱に入るとか、先生が病気で休講とかのフラグも折られている）意気消沈する主人公。

そこに、世界を破壊する破壊神が地球に舞い降りた。

その破壊神を倒すため、主人公は「自分にかかっている全ての死亡フラグと生存フラグ」を破壊するよう彼女に依頼し、フラグを破壊することで生じた力で、世界を破壊する破壊神を倒すよう彼女に依頼した。

主人公のフラグを全て破壊した力により、世界を破壊する破壊神が倒されたが、主人公の「死亡フラグと生存フラグ」全てを同時に破

壊されたので、主人公は不死の存在「破壊神」になっちゃおう（この部分は、破壊神の出生の秘密とともに、続編を出すための設定でもある）。

という内容だった。

そしてタイトルを「お前は俺の、はかいしん！（仮題）」だと話したところで、私は寝てしまった。

数ヶ月後、私は完成した「お前は俺の、はかいしん！」の原稿を出版社に持ち込んだところ、すでに同じタイトルの新刊が、来月発売予定だと聞いて驚いた。

編集者に確認すると、作者は私の友人だった。

私はさっそく友人に苦情を言おうと、友人は、

俺の女神（破壊神）様には、なきぼくろがあるとか

世界を破壊する破壊神の背中には、翼が生えているとか

幼なじみの部活は、クリケット部ではなくてラクロス部とか

委員長の髪型が、ストレートではなくて三つ編みとか

全然違うだろうと一蹴した。

全然違うのであれば、私が同じタイトルで出版しても問題ないだろうと指摘すると、

「そ、そうだな」

と快諾してくれた。

だから、私の「お前は俺の、はかいしん！」は決して盗作ではありません。

どうかご安心してお読み下さい。

「お前は俺の、はかいしん！（斑鳩茂市版）」
（2015年斑鳩茂市）

お前は俺の、はかいしん！（斑鳩茂市版）（後書き）

思いつきだけで、作成しました。
すぐ後悔しています。

「お前は俺の、はかいしん！（委員長の髪型がポニーテール版）
があれば、すぐに買いに走りますが。」

お前は俺の、はかいしん！ (2) (前書き)

本作品は一話完結ですが、この話だけは第17話「お前は俺の、はかいしん！ (斑鳩茂市版)」をお読みいただくと、いっそう楽しめる内容となっております。

お前は俺の、はかいしん！（2）

前作「お前は俺の、はかいしん！（斑鳩茂市版）」のあとがきにも掲載していますが、前作の内容について、改めて謝罪をさせていただきます。

前作のまえがき部分や、WEBでの無料掲載部分だけ読んだ読者から、

「さすが斑鳩先生、まえがきでオチまで掲載するとは（笑）」

「友人の執筆量の半分で終わらせるとは、すごい圧縮技術（笑）」

「委員長の髪型がポニーテールなら買っていたのに（涙）」

等のご感想をいただきました。

残念ながら、まえがきに記載していたのはあくまで構想時点の内容であり、本文の内容は、オチの部分を中心に大幅に改変しております（詳しくは、前作をお読み下さい）。

おかげで、最後まで読んで頂いた読者からは、

「まえがきに騙された（むろん良い意味で）」

「さすが、斑鳩先生。友人とは格が違った」

「委員長のポニーテール最高です！」

との評価をいただいて、今作を刊行することができました。
読者の皆様に感謝を申し上げます。

唯一残念なのは、友人と酒を飲む機会が無くなってしまったことです。

「お前は俺の、はかいしん! (2)」 (2016年斑鳩茂市)

お前は俺の、はかいしん！（2）（後書き）

一話完結なのに、続きを作ってしまった。
反省しております。

ちなみに、このタイトルについて、友人の心が折れた意味を含めて付けたタイトルと言われていますが、真実は作者が墓に持っていたことから不明です。

最強の弁護士「海老熊 修」の弁論技法

日本の弁護士の中で、最も多くの勝訴を勝ち取った男、海老熊修氏の裁判での弁論をまとめて、氏の解説を加えた解説書である。

彼の弁護が有名になったのは、恵我利氏の民事裁判闘争である。

刑事事件については、「ドリームチーム」と呼ばれた、当時の名だたる弁護士を金にあかして集めたのだが、ほとんどの事件で恵我利氏の有罪を覆すことができなかった。

有罪となり、裁判闘争資金も使い果たした恵我利氏は、民事裁判をすべて、新任弁護士の海老熊氏に任せた。

彼は、刑事事件の影響を強く受けていたにもかかわらず、裁判のほとんど全てを鮮やかな逆転勝訴を勝ち取ったことで、世間の注目を集めた。

私と海老熊氏との関係は、恵我利氏の裁判で、私が証言した時の縁で関係が始まったのだが、彼の弁論技法に興味を惹かれて、裁判資料を集めることになった。

彼の弁論における、技法の具体的な内容については、本文で解説するが、大きく2つの特徴がある。

一つめは、簡潔でありながら、明確に要旨を説明すること。

二つめは、平坦な語り口でありながら、多くの聴衆の心に響かせることである。

彼の弁論はまるで、日本語が持つ原石の美しさを、飾ることなく輝かせているようである。

最後に、私が海老熊氏に依頼した、「お前は俺の、はかいしん！」出版差し止め裁判について述べたいと思う。

去年の裁判で、私が敗れたのは、私が盗作したからではなく、海老熊氏が本書のような弁論を行わなかったからである。

現在、高裁に控訴しているが、海老熊氏には高裁ではぜひ、本書のような鮮やかな弁論で逆転勝訴を勝ち取ってもらいたいものである。

）「最強の弁護士「海老熊 修」の弁論技法」（2018年斑鳩茂市）

わかりやすい「新特別市法」解説（前書き）

いつのまにか20話掲載となりました。

ただ、この作品が一切評価されていないので、そろそろ別の展開を考える必要が有るかも知れません。

わかりやすい「新特別市法」解説

新沖市（注1）の建設をきっかけに、新しい形の都市（注2）が定義付けされたのであるが、都市の建設の経緯が、紆余曲折したことから（注3）、改正法案の中心となる「沖ノ鳥島に新しい特別市を建設するにあたり、必要な法律を改正するための法律」（注4）通称「新特別市法」が制定された後も、どのように法律が改正されたのか、新沖市の権限は他の地方公共団体と比べて権限がどのように異なるのか、国の業務が移管されているのか、あるいは、市の職員の身分が地方公務員法で定められたものと同等であるのか等、非常にわかりにくいと言われている。

本書では、「新特別市法」の改正内容を中心にわかりやすい解説を行った。

本書の特徴として、第1章にこの法律が成立するまでの経過について記載し、第2章ではこの法律が目指す考え方を中心に記載し、第3章以降では「内閣法」「国家公務員法」「地方自治法」「地方公務員法」等改正された法律ごとに具体的に改正された部分について、詳細の解説を行った。

最後に資料として、法律改正までの経過と「新特別市法」に関する法律との関係性を理解するための図表を添付した。

ご理解の一助になれば幸いである。

（注1）新沖市

地球温暖化による、海面上昇に伴い、沖ノ鳥島が消失する危機が訪れた。

島の消滅に伴う海洋資源の権益消失をおそれた政府は、メタンハイドレート採掘プラント計画で利用した、メガフロート技術を応用し、

沖の鳥島周辺を正六角形状のメガフロートで取り囲み周辺の海水を汲み上げることで、恒久的な領土の確保を行うことになった。

メガフロートによる都市の建設については、太平洋への権益拡大をもくろむ中国などが否定的な態度を示したが、海面上昇による国土消失の危機にあった、東南アジアの国々に同様の技術提供、経済支援を行ったことで、沖ノ鳥島の領土問題を直接反対する国際勢力はなくなった。

当初は東京都内の新しい特別区として、東京都特別区の24番目の区として計画されていたが、最終的には国、都道府県、市の権限を統括する特別地方自治体「新特別市」として2026年に誕生した。

（注2）新しい形の都市

もともと、沖ノ鳥島は東京都に属していたが全く新しい形の都市を建設することにともない、新規に建設される都市の行政区分について、効率的な行政運営を行うという観点から、これまでの国、都道府県、市町村の事務のあり方を見直す議論になった。

議論の中心は国、東京都との権限を中心としたもので、国と東京都は対決姿勢をとったが、とある官僚が独自に計画した試案が外部にリークされるとマスコミ、経済界を中心とした勢力が試案を支持した。

試案では、都市の行政組織は国（外交、防衛を除く）、都道府県、市の機能を統合したものとなり、一元的で簡潔な組織を持つことになった。

行政組織の長は、新沖市長が担う。

新岡市長は、国の業務を担うため内閣府新沖市開発局長を兼務している。

詳細については第3章で解説するが、内閣府新沖市開発局長の設置経緯から、「新特別市法」により改正された内閣法により総理大臣が特別職の国家公務員として、新沖市長を内閣府新沖市開発局長として任命することになるが、総理大臣が直接解任できない役職とな

っている。

（総理大臣が新沖市議会に解任提案を提出し、新沖市議会が過半数の承認を得ることができれば解任される。当然、総理大臣の解任提案理由は、内閣府新沖市開発局長上の職務に関する事務に限定され、議会が否決すれば、同じ理由では解任提案はできない。当然地方自治法で定めている首長の不信任決議は新沖市長に対して有効であり、新沖市長が失職すれば、当然内閣府新沖市開発局長の地位も失う。）

（注3）紆余曲折したことから

領土問題に端を発した沖の鳥島開発計画は、当初、第二次護岸工事のみで完結するはずであった。

しかしながら、海洋法に関する国際連合条約第121条3項で定められている「人間の居住又は独自の経済的生活を維持することのできない岩は、排他的経済水域又は大陸棚を有しない」に抵触し排他的経済水域を有しないという指摘が、中国を中心に行われた。

このため、NEDO（独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）が当時開発していた、メタンハイドレード採掘用のメガフロートプラント設置技術を利用して、周辺の海域にメガフロートを設置し、沖ノ鳥島周辺の海水を生活用水や海洋温度差発電用水としてくみ上げることで、海水面を低下させ、設置したメガフロートを海上自衛隊基地施設とその住居に当てる計画を政府が発表した。

海上自衛隊統合計画により基地規模が縮小されたため、国土交通省が新都市開発計画を提案し、総務省と通商産業省が合同で新都市開発プロジェクトとして別に提案すると、代替首都機能移転プロジェクトと一体的なプロジェクトとして肥大化する。

最終的には、代替首都機能移転プロジェクトは、新都市の東京都からの独立と引き替えに頓挫したが、国土交通省と総務省が都市を開発し、総務省と通商産業省とで移住計画を推進していった。

（注4）沖ノ鳥島に新しい特別市を建設するにあたり、必要な法律

を改正するための法律

通称「新特別市法」。

新沖市の設置にあたり、最大の問題点は法律の改正方法であった。新沖市が、当初想定されていた、東京都特別区の追加ではあまり必要なかった法律の改正が、大量に改正する必要が生じた為、内閣官房内に各省庁から、法制担当の官僚を引き抜いて編成したプロジェクトチームを設置し、内閣官房長官直属の組織としてわずか1年で改正法案の策定にまでこぎ着けた。

）「わかりやすい「新特別市法」解説」（2005年斑鳩茂市）

わかりやすい「新特別市法」解説（後書き）

現在、実現していない科学技術を用いたフィクションをSFと定義すれば、一応この話もSFになるのでしょうか。

まあ、本書がSFに分類されるのかどうかは、私にはわかりませんが。

あのカオスワールド事件を解決したローズ・レクチャーの伝記「最後の冒険者」（仮題）ですが、「まえがき」ではなく、別小説として掲載可能か交渉中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572q/>

まえがき ～斑鳩茂市作品集（まえがき部分のみ収録）～

2011年11月17日03時42分発行